哲学会　第 60 回研究発表大会　ワークショップ「ハイデガー哲学の政治性」報告（梶谷真司）、『倫理学論究』、vol. 8, no. 1, pp. 6- 10.

哲学会　第 60 回研究発表大会

ワークショップ「ハイデガー哲学の政治性」報告

梶谷真司[1]

2021 年 10 月 30 日（土）、「ハイデガー哲学の政治性」というテーマで東京大学哲学会のワークショップが行われた。登壇したのは、ハイデガー研究者で昨年『ハイデガーの超-政治――ナチズムとの対決/存在・技術・国家への問い』（明石書店）を公刊した轟孝夫氏（防衛大学校）と、2016 年の日本哲学会大会で「哲学の政治責任――ハイデガーと京都学派」と題するシンポジウムでパネリストを務めた品川哲彦（関西大学）である。以下、当日の講演とディスカッションの概要を報告する。

まず轟氏から提題がなされた。

ハイデガーがナチ党員としてフライブルク大学総長を務めたナチス問題については、これまで民族主義や反ユダヤ主義のようなナチスの思想に通じる要素をハイデガー哲学の中に見出すことによって論じられることが多かった。しかしそれでは、ハイデガーの思想を正しく評価することにはならない。したがってここではハイデガーがナチスをどのようなものとして捉え、関わろうとしたのかということについての彼自身の説明に基づいて、彼のナチス問題を考えていく。そのさい轟氏が注目するのは、ハイデガーの学問論である。

彼の学問論は、ウェーバーの唱える価値から自由で社会に直接コミットしない「職業としての学問」に対置されたものだった。ハイデガーは専門分化し、世界の意味に回答を与えるものではない学問の現状を批判し、学問を「存在への問い」に基づいて、存在者全体、世界全体へと向かう包括的な知の営みであることを求める。そうした観点から、彼は大学を国家や民族を真に基礎づけるそうした知の教育の場になることを求めていた。

こうしたハイデガーの主張は、当時とりわけ若い学生たちのあいだで広がっていた既存の大学や教授の権威に対する反発、反主知主義的なエートスに呼応するものだった。それゆ

[1]　梶谷真司（かじたに　しんじ）。東京大学大学院総合文化研究科教授。

え、彼の哲学は学生たちから熱狂的に支持された。こうした学生たちがナチスに傾倒し、ナチス政権獲得後、大学の運営に大きな影響力を及ぼすようになったとき、ハイデガーはそこに年来の大学改革構想を実現するチャンスを見て取り、フライブルク大学の総長職を引き受けた。

しかし轟氏によれば、ハイデガーの立場から見て、学生も大学もナチズムも結局は彼が批判する既存の学問の体制を維持しようとする勢力でしかないことが明らかになり、そのためハイデガーは自分の構想する改革を断念し、一年足らずで総長を辞任することになった。このようにハイデガーによるナチスへの加担は、反ユダヤ主義よりも存在への問いから構想された彼の学問論の実現への努力とその挫折として見なければならない。

このような発表に対して、ハイデガーの大学論のアクチュアリティに関連する質問があった――今日でも大学は国家に支えられて成り立っているわけだが、国家における大学の位置づけは、ハイデガー的な観点からどのように捉えられるのか。これに対し轟氏は、研究者が今日競争的資金を取るさい、時代や社会の要請に応えざるを得ないわけだが、ハイデガーから見れば、ここで支配的な学問観は、学問が国家に役立つべきだとするナチスのそれとまったく異ならないと述べた。そして氏によると、ハイデガーは学問はそうした流れに追従するのではなく、むしろ存在そのものを明らかにするものとなることを求めていた。ハイデガー研究に関して言えば、彼をナチだと決めつけるような風潮に抗して、ハイデガーの思想そのものをきちんと理解して提示していくことが重要だとのことであった。

次に、ハイデガーは自らの存在論的学問論によって近代主義的学問に潜むニヒリズムを克服し、大学改革ができるとなぜ思えたのかという質問が出された。これに対して轟氏は、ハイデガーは学生のあいだでの自分の人気を過信しており、彼らから支持を得られるだろうと思ったのは荒唐無稽だと言われればそうだろうと述べ、だからこそ結局は学生たちには受け入れられず、同僚の反発も買うことになり、総長をやめることになったと回答した。

続けて、ナチズムを国家社会主義ではなく、国民社会主義と訳していることについて質問があった。これに轟氏は、最近のドイツ史研究の動向を踏まえてのことだと答えた。国家社会主義と言うと、国民の責任の所在が曖昧になる恐れがあり、国民が積極的に関わったということを明確に示すために、このような訳語が定着しつつあるとのことだった。

続いて品川氏から提題がなされた。

品川氏によれば、ハイデガーがナチズムに加担したのは、存在を忘却して存在者の操作に没頭する態度が支配している近代形而上学の現状に抗して、存在者全体を問いかつ把握するギリシアの哲学の元初を取り戻すためだった。とはいえ、ハイデガーが一貫してもっていた企図において、存在者全体に関わると言っても、どうすべきかという規範が与えられていない決まっているわけではない。ハイデガー自身に関して言えば、彼の存在論にユダヤ人を危険にさらすような特定の存在的な判断が含まれていて、それが彼をナチスへと接近させたのではないかというのが品川氏の見解である。

しかも轟氏によれば、「存在の問いはそれ自身が共同体の基礎づけを目指している」のであれば、それは不可避に政治性を帯びる。その共同体が実際にどこにおけるどの民族のものなのか、誰を成員として認めて誰を排除するのか、どこにその正当性の根拠があるのか、そこにハイデガーが捉えたドイツの特定の時代的文化的状況が反映している。ハイデガーが近代の主体性の形而上学の本質とする作為性、計算的思惟をユダヤ教に由来すると考え、地盤喪失性をユダヤ人に帰する。そこにはディアスポラの歴史の理解がみられない。このようにハイデガーが批判する「ユダヤ的なもの」はたんなる存在論的な特徴づけではなく、存在的にユダヤ人を含意しているのではないか。ハイデガーの思想が現実の存在的なレベルを超えるメタ存在論であったとしても、そうした特定の判断が含まれているのであれば、その正当性の根拠を問い直すべきであろう。

またハイデガーが大学総長となってナチズムに関わったのは、自分の思想を実現しようとしたのであって、それは超政治が何であれ、彼自身が批判する計算的思惟を行使することだった。後年ナチズムも含めて近代の主体性の形而上学を批判するさい、そうした自分の行動を反省したのかもしれないが、ハイデガーの語る政治においては、民族に属するものに全体としての決断を迫るもので、多数性が排除されている。ハイデガーの思想には、もともと自他の相互承認の契機が乏しく、他者の存在が十分に位置づけられていない。

以上の品川氏の発表にいくつか質問がなされた。

まずハイデガーにおいては、他の現存在の存在の問題が重視されていないという品川氏の指摘に対して、事柄として、存在の思索において不可欠な要素として他者があるとは考えないかという質問が出された。品川氏はそれに以下のように答えた――『存在と時間』も含めて現象学的な問題設定からして、自己と他者は非対称的にならざるをえず、それはフッサールも同様である。もちろん本人は、自己と他者は対称なものとして位置づけようとしてそ

のように言っている部分もあるが、方法論的にはそれをきちんと論じることは、ハイデガーにはできていないように思うとのことだった。

次に、近代において理性や主体自身が道具的になっていると思うが、それをハイデガーはどのように見るのかという質問がなされた。品川氏は、物を道具とみるのは時代を超えて普遍的に妥当すると考えるが、ただしハイデガーが語った時代では、彼自身が道具的な理性に批判的な態度をとっていても、科学技術が発達した時代においては、まさにその分析は道具的理性の時代にあった分析だったのではないか。

またハイデガーがナチスに加担したことについて、ハイデガーの哲学にそのような部分があったのかという質問もなされ、品川氏としては、『黒ノート』が公刊された今日では、そのような見方が優勢ではあるが、『存在と時間』を読んだらナチスにつながるとは考えないとのことだった。ただし、先駆的決意といっても、そこからおのずと何をすればいいかは帰結せず、実際にどうすべきかとなった時に、ハイデガー自身、当時の社会で共有されていた価値観や物の見方からナチスに向かったと言える。

以上の二人の提題を踏まえて、総合討論に移った。

ハイデガーのナチズム加担について轟氏は、存在論的な超政治の議論は、現実の政治のレベルとは自覚的に一線を画して、それを根本的に批判するものであると言う。品川氏はそれはそれとして認めつつも、そこには現実の政治のレベルで特定の含意をもってしまっているのではないかという指摘をしていた。つまり轟氏はハイデガーの思想について語り、品川氏はハイデガーの思想が現実と関わるときに与えた結果にたいする責任について語っていて、議論が必ずしもかみ合ってはいなかった。けれども、私が思うに、ここには哲学や思想をどのようにして現実の生活に結びつけるかという重要な問題がある。

轟氏もまた、ハイデガーの放下について品川氏が具体的にどのような態度なのか、何をどれだけ放下するのか分からない言う場合、たとえば品川氏がハンス・ヨナスを手掛かりに考える環境問題ではどうなるのかという問いかけを返した。品川氏は、放下を一つの態度として認めつつも、具体的な行動に考えるさいには、計算的思惟にならざるをえない。それが悪いわけではなく、両者の間をどのように架橋するかということが考えなければいけないと述べた。

ハイデガーの大学改革やナチズムへの関与をどう評価するにせよ、そこで考えようとした共同体、国家、民族が、存在への問いとの関連でどのように考えられるのか、今なお重要

な問題であろう。この点について最後に二人に伺った。そこで轟氏は、民族というのは、近代の主体性の形而上学の帰結であることの国民国家に民族を回収してしまうのではなく、本来は存在に根差している、それぞれの環境、ピュシスに根差しているものとして捉えるべきだとする。品川氏は、それに呼応して、まさにこの問題を日本において考える必要があり、そのさい天皇の問題は回避できないと述べた。

以上がワークショップの概要である。

今回、ハイデガーのナチス問題から出発しながら、学問、政治、共同体、国家、民族など多岐にわたるテーマに議論が及んだ。どの点を取っても二人の問題設定は微妙に、しかし本質的なところでズレていた。しかしむしろそれゆえにかえって、哲学と現実の関係を考えるのに貴重な視点が浮き彫りになったように思う。それは轟氏と品川氏の二人の深い学識と妥協のない議論をもってはじめて可能になった。心より謝意を表したい。